

13. 療育施設を利用している発達障害児（疑い含む）の父親の育児実態と支援の検討 ～父親・母親の比較検討～

石田史織、山崎明美、高橋宏子、五十嵐久人、奥野ひろみ（信州大学医学部保健学科）

キーワード：発達障害児、家族支援、父親、療育

要旨：発達障害児の家族支援の重要性は高いにも関わらず、父親の支援検討が十分でない。そこで、発達障害児（疑い含む）をもつ父親と母親を対象にアンケート調査を実施し、育児の実情や意識等の共通点・相違点を明らかにし父親への具体的な支援を検討することを目的とした。結果、父親は社会的背景において、子どもや発達障害の理解や、療育のスキルが十分に得られない状況にあることが予想された。このような状況を改善することは、母親や家族全体の支援にもつながる。以上より、社会全体の体制整備に加え父親のライフスタイルや特性に合わせた取り組みが必要である。

A. 目的

発達障害児の場合、親の育児負担や不安は特徴的で、それに見合った支援の必要性や重要性は高いと言われる。しかし、家族支援の中でも父親に対する支援に関する検討は十分でない。本研究では父親・母親間の状況を比較検討することで、発達障害児（疑い含む）育児に関する実情や思いの共通点や相違点を明らかにし父親に見合った具体的な支援を検討することを目的とする。

B. 方法

1. 研究対象・期間

2016年7月～9月にA県内で未就学児を対象に療育を行う療育施設（39施設）を利用する児の父親と母親を対象に自記式調査紙郵送法で調査を行った。調査前に各施設長へ調査協力と調査対象人数の報告依頼を行い、施設長より承諾を得られた8施設を対象とした。対象施設に人数分の調査票を送り、返信をもって本人の承諾を得た。

2. 調査内容・分析方法

調査内容は、基本属性と育児に関する実状や思いについて、先行研究や文献を参考に（1）発達障害児の育児の意識と抱える問題に関する16項目（小項目：意識3、ストレス8、不安5）、（2）発達障害児の理解と対応に関する29項目（小項目：発達障害児（疑い含む）の理解と心がけ8、発達障害児（疑い含む）の特徴・特性に関する認識14、発達障害児（疑い含む）の特徴への対応方法を作成した^{1) 2) 3)}。分析方法は、Mann-Whitney U検定で父親・母親間比較とし、 $p < 0.05$ を有意とした。本調査は、信州大学医倫理委員会の承認を得て実施した。

C. 結果

1. 回答状況

父親・母親合わせて470人に配布し、186人より回

答があった（回収率39.6%）。うち記入漏れなどない166名（有効回答率35.3%）を分析対象とした。

2. 対象者の属性

表1に対象者の基本属性を示した。

表1 基本属性

	父親(N=78)	母親(N=88)
年齢 ¹⁾	40.0±6.09	38.0±5.31
学歴 ²⁾		
高卒	16(20.5)	16(18.2)
専門学校・短大卒	21(26.9)	42(47.7)
大学卒以上	41(52.6)	30(34.1)
就労状況 ²⁾		
就業している	78(100.0)	42(47.7)
就業していない	0(0.0)	46(52.3)
家族形態 ²⁾		
核家族	60(76.9)	69(78.4)
拡大家族	18(23.1)	14(15.9)
健康状態 ²⁾		
良い	71(91.0)	73(83.0)
悪い	0(0.0)	3(3.4)
どちらともいえない	7(9.0)	12(13.6)

1)平均値±SD 2)人数(%)

3. 発達障害児（疑い含む）の育児の意識と抱える問題

意識に関する2項目 ($p < 0.001$)、ストレスに関する4項目 ($p < 0.05$)、不安に関する3項目 ($p < 0.05$)で有意差がみられ、どれも父親群の平均値が有意に低かった。(表2)

表2 発達障害児（疑い含む）の育児の意識と抱える問題

	父(N=78) (平均値±SD)	母(N=88) (平均値±SD)	p値
意識	育児に積極的に関わっている	2.9 ± 0.70	3.7 ± 0.52 <0.000 ***
	可能な範囲で育児に関わろうと努力している	3.3 ± 0.47	3.7 ± 0.52 <0.000 ***
	父親/母親ならではの育児をしようという意識がある	3.0 ± 0.73	3.2 ± 0.81 0.139
ストレス	子供の成長を感じられないことにストレスを感じる	2.2 ± 0.90	2.5 ± 0.97 0.043 *
	子どもの困った行動に対してうまく対応できないことにストレスを感じる	2.9 ± 0.83	3.1 ± 0.87 0.097
	他の子と比較し我が子を否定的に思うことにストレスを感じる	2.2 ± 0.89	2.4 ± 0.97 0.206
	配偶者との育児の方向性が異なることにストレスを感じる	1.9 ± 0.81	2.3 ± 1.01 0.011 *
	ワークライフバランスがうまく保てないことにストレスを感じる	2.2 ± 0.94	2.5 ± 0.97 0.120
	我が子に対する社会的差別的意識にストレスを感じる	1.9 ± 0.82	2.4 ± 0.95 0.001 **
	自身が持つ発達障害への差別的意識にストレスを感じる	1.7 ± 0.71	1.9 ± 0.79 0.263
不安	配偶者の育児が不十分なのにストレスを感じる	1.6 ± 0.73	2.3 ± 0.95 <0.000 ***
	子どもとの関わり方について不安に思う	2.2 ± 0.95	2.4 ± 1.00 0.147
	子どもの今後の成長が不安に思う	3.1 ± 0.80	3.3 ± 0.77 0.014 *
	自身の仕事による子どもへの影響が不安に思う	2.2 ± 0.99	2.0 ± 0.93 0.138
	子供の就園・就学後の生活が不安に思う	3.1 ± 0.86	3.3 ± 0.83 0.042 *
将来自立した生活が進められるかどうか不安に思う	3.3 ± 0.85	3.6 ± 0.71 0.027 *	

1) Mann-Whitney U検定 平均値(±SD) $P^* < 0.05$ $P^{**} < 0.01$ $P^{***} < 0.001$
2) ともあてはまる4点～あてはまらない1点の4件法で算出

4. 発達障害児（疑い含む）の理解と対応

「子どもが頑張っていることを知っている」 ($p < 0.001$)、
「子どもの成長を促す関わりを心がけている」など4項目 ($p < 0.01$)、「子どもに合わせた対応をとるように心がける」など2項目 ($p < 0.05$)で有意差がみられ、どれ

も父親群の平均値が有意に低かった。

発達障害児（疑い含む）の特徴に関する認識では、特徴として「コミュニケーションが取れない」「言葉が出ない」「パターン化した行動がある」「感覚過敏」などすべての項目で有意差がみとめられなかった。

発達障害児（疑い含む）への対応では、「関心・注意を他に向ける」など2項目（ $p < 0.01$ ）、「叱責する」（ $p < 0.05$ ）で有意差がみられ、どれも父親群の平均値が有意に低かった。（表3）

D. 考察

1. 父親の育児状況

父親は、母親同様に子供を理解しようと努力している姿が見受けられた。また、子どもの成長を促す関わりや子どもに合わせた対応をとろうとする心がけの差や、発達障害の特徴的な行動への対応状況の差から父親の育児の困難さや不十分さが読み取れた。加えて、父親の育児の不十分さや夫婦間での育児の方向性の相違によって母親がストレスを抱えていることも示された。これは、柏木らが日本の父親は諸外国と比較して子育てをする度合いも、子どもと過ごす時間も最低レベルだが原因は働き方、労働事情を無視できない⁴⁾としている。本研究の対象である父親も全員が就業していることから同様の傾向にあると考えられる。これは、子どもを理解しようという心持ちがあっても、十分に育児に関わる時間がとれず、子どもと関わる時間が長い母親に比較すると日常からの子どもの成長や理解が難しい状況にあることが読み取れた。そのような状況では、専門家や専門機関とつながりにくく、発達障害の特徴に合わせた関わり方である「療育」の必要性の理解や実施のためのスキルの獲得は困難となる。また、健常児の父親と比較して、発達障害児の父親は障害の特性による関わりにくさや、できたという実感の持ちにくさに翻弄され継続して積極的な意識が保てない⁵⁾とされていることから、父親にとって障害の理解や療育のスキルを学ぶ機会は重要である。加えて、父親が発達障害や療育の必要性を理解し、参加することは三原ら³⁾が示すとおり、母親のストレス軽減や育児の中での抑うつ感情が軽減され育児意欲を高めることが予測され、発達障害児（疑い含む）を支える家族の基盤強化につながる。

2. 父親に必要な支援

障害の理解や、子どもの特性に見合った対応をするためにも父親が療育施設を活用できるようつながりが

表3 発達障害児（疑い含む）の理解と対応

	父(N=78)		母(N=88)		p値
	(平均値±SD)	(平均値±SD)	(平均値±SD)	(平均値±SD)	
発達障害児(疑い含む)の理解と心がけ	子どもが喜ぶことを知っている	3.3 ± 0.55	3.5 ± 0.55	0.011 *	
	子どもが頑張っていることを知っている	3.2 ± 0.68	3.5 ± 0.57	<0.000 **	
	子どもの得意なことを知っている	3.1 ± 0.72	3.4 ± 0.70	0.005 **	
	子どもの好きな物等を知っている	3.4 ± 0.63	3.6 ± 0.54	0.009 **	
	子どもの頑張りや努力を誉めてあげたいと思う	3.6 ± 0.55	3.8 ± 0.45	0.001 **	
	子どもの成長を促す関わりを心がけている	3.1 ± 0.66	3.4 ± 0.60	0.001 **	
	子どもに合わせた対応をとるよう心がけている	3.1 ± 0.56	3.3 ± 0.58	0.029 *	
	子どもを理解しようと努力している	3.4 ± 0.56	3.5 ± 0.59	0.110	
	叱責する	2.5 ± 0.98	2.8 ± 0.86	0.051	
発達障害児(疑い含む)の特徴への対応方法	体罰を与える	1.7 ± 0.85	1.7 ± 0.80	0.780	
	関心・注意を他に向ける	2.6 ± 0.87	3.0 ± 0.77	0.013 *	
	子どもが嫌いな活動(感覚)等から逃れさせる	2.5 ± 0.83	2.6 ± 0.82	0.579	
	子どもが好きな活動(感覚)を行う	3.0 ± 0.79	3.0 ± 0.58	0.826	
	要求か気を引く行動か判断し気を引く行動であれば無視をする	2.0 ± 0.77	2.2 ± 0.83	0.068	
	自らがその場を立ち去る	1.6 ± 0.65	2.0 ± 0.90	0.005 **	
	1) Mann-Whitney U検定 平均値(±SD) P<0.05**<0.01***<0.001				
2) とてもあてはまる4点～あてはまらない1点の4件法で算出					

持てるような工夫が必要だと考える。また、父親が育児に参加する時間確保のための体制整備として、父親のワークライフバランスの見直しや社会全体における仕組みづくりが必要とされる。加えて、父親のライフスタイルや特性^{1) 6)}を考慮し、インターネットやSNSを利用した手軽でかつ確実な発達障害児の育児不安の解消ツールや療育の理解を深める取り組みを行うことも有効な支援の一つとして提案する。また、父親同士の交流の機会を充実させ、ピアサポートによる精神的ケアも必要と考える。

E. まとめ

発達障害児（疑い含む）の父親は社会的背景において、子どもの理解だけでなく、発達障害の理解や療育の必要性・実施のためのスキルが十分に得られない状況が予想された。それに対し、社会全体の体制整備に加え父親のライフスタイルや特性に合わせた取り組みが急務である。

F. 利益相反

本研究における利益相反はありません

G. 引用文献

- 1) 石田史織, 高橋宏子, 五十嵐久人: 療育センターを利用する発達障害児の成長を支える父親の役割, 第38回長野県看護研究学会論文集: 7-10, 2018.
- 2) 山下亜紀子: 発達障害児の母親が抱える生活困難についての研究, 日本社会精神医学会雑誌 22: 245, 2013.
- 3) 三原博光, 松本耕二: 障害児の父親の生活意識の検証-障害児の年齢, 出生順位, 妻の仕事の有無に着目して-, 社会福祉学 53 (2): 114-115, 2012.
- 4) 柏木恵子: 父親になる, 父親をする-家族心理学の視点から-, pp.23-24, 岩波書店, 2011.
- 5) 今西良輔, 発達障害児を育てる父親の生活体験-3人の父親と息子達の歩み-, 北海道医療大学看護福祉学部会誌 9 (1): pp27-34, 2013
- 6) 関根剛, 間三千夫, 室みどり: 父親の育児支援に影響を与える要因について, 和歌山信愛女子短期大学紀要 (40), pp35-40, 2003.